

『リチャード2世』、大衆劇場版の娯楽性

中野春夫

シェイクスピアは『ヘンリー6世・第1部』の中で、活動時期がまったく異なるジャンヌダルクとジョン・トールボットを戦場で一騎打ちさせ、『ヘンリー4世』2部作ではフォールスタッフという、同時代人には「コック・ローレル」のような浮浪者王としか思えない人物を登場させている。当たり前のこととは言え、シェイクスピアは年代記編纂家ではなく、演劇産業という娯楽ビジネスの劇作家であったから、年代記等の材源の記述や設定を自由に作り変え、観客に歴史の娯乐的なシミュレーション世界を提供した。

同様に、シェイクスピアは『リチャード2世』を執筆するにあたって、材源に対しさまざまな書き換えを行ったばかりか、年代記等では考えられないような斬新な設定を施している。本論は一連の書き換えと新たな設定の付加に注目し、シェイクスピアの『リチャード2世』の特異性を同時代の娯楽コンテンツという脈絡から考え直してみたい。

1. リチャード2世暴君表象のひな型、強制融資と財産没収

トマス・モアの『リチャード3世伝』における冒頭の描写がリチャード3世の極悪神話を流布させたように、リチャード2世のステレオタイプのイメージも、リチャードの同時代人による「よく知られるコメント」

(Given-Wilson 70) によって生み出されることになる。ベネディクト会修道士のトマス・ウォルシンガム (?-1422) は「リチャード2世治世編年史 (*Annales Ricardi Secundi*)」の中で、1397年夏にドイツ諸侯の使節団が隠密に訪英し、選帝候の多くが次期神聖ローマ皇帝選挙でリチャード2世に票を投じたいと考えていると伝えたところ、リチャード2世は「この情報を即座に信じ込み」、舞い上がることになった、と記している。続けてウォルシンガムは、この提案が真実かどうかは分からないが、「一つのことには確か」と述べ、リチャード2世の暴君への変身を煽情的に物語っている。

一つのことには確かなこととして知られており、それは、この出来事以降リチャード王が暴君となり、莫大な融資の強制でイングランド臣民を苦しめ始めたことである。王国内で富裕者として知られる高位聖職者、自治都市、商人は誰もが身を隠すこともできず、強制的にリチャード王に融資を迫られた。王の代理人は王爾が押された借用証書を持参しており、この借用証書にはあらかじめ借りたい金額を記入し、融通させる相手が見つかったから初めて債権者が裏書された。この代理人たちが地方の都市や街に到着すると、彼らはその町で最も富裕な人間たちの名前をこっそりと調べ上げ、候補が見つかると、あたかも相互納得ずくの融資であるかのように見せかけるため、債権者に名前を裏書させたのである。このように、狡猾な国王の代理人たちは莫大な金額を王室財務にもたらした...

One thing is known for sure, that from that time onwards he began to tyrannise and burden his people with great loans, so that no prelate, no town, no citizen, indeed no one anywhere throughout the whole of England who was known to have any wealth, could find a place to hide, but was forced to loan his money to the king. His agents in this business carried with them letters sealed with

the royal seal, but they were not endorsed until they found the people from whom they wanted to borrow it. Then when these agents arrived in towns or cities, they would make secret inquiries to find out who were the richest people there, and, having been given a name, would endorse the letters to make it look as if it had actually been agreed by them. Thus did the wily royal agents acquire untold sums for royal treasury... (Given-Wilson (1993) 71)

今日の私たちには、極悪国王といえはすぐさまリチャード3世が連想される。ところが、シェイクスピア時代の歴史書と芝居小屋では別格的な暴君ヒーローはリチャード2世であり、リチャードの暴君像のひな型はこの記述から生まれていた。のちの年代記や演劇作品などがリチャードの圧制を描く場合には、まず性格としてリチャードの（神聖ローマ皇帝を夢見るような）権勢欲が挙げられるようになった。この点がリチャード3世の極悪神話と決定的に異なる点で、リチャード2世は生まれつきの極悪人ではなく、『リチャード2世』批評がしばしば指摘するように、権力欲や虚栄心、浪費癖が強く、感情の揺れが激しい性格の持ち主と見なされるようになった。ウォルシンガムの記述では1397年夏であるが、のちの年代記では、1397年後半か1398年前半にリチャードの中で暴君スイッチが入りだし、マグナカルタに違反する違法な課税徴収と財産没収を繰り返すようになる。

リチャード2世像のひな型とは、リチャードの暴君性や圧政が無慈悲で詐欺的な課税や強制融資、相続権剥奪による財産没収という具体的な行為で表現されることであり、違法な融資強制や課税、財産没収がリチャード2世の代名詞となった。ただし、上記に引用したウォルシンガムの情報は「リチャードの没落に関する古典的な『ランカスター朝礼賛』の解説 (the classic 'Lancastrian' account of Richard's fall)」(Given-Wilson (1993) 70) であり、暴君の具体例として提示される強制融資の糾弾もフェイクニュースであった可能性が高い。ところが真偽不明の情報が独り歩きし、そ

の情報がのちの年代記を通じて拡散されるたびに、読者を意識した煽情的な脚色が次々に施されていくようになる。

2. 年代記の書き換え、作り替え

上記のウォルシングムの記述をみるかぎり、リチャードが行ったとされる裏書が空欄の借用証書は、今日でいえば最初から不渡りを想定した小切手に相当するものである。ところが、その脚色ヴァージョンがシェイクスピア劇に登場し、さらに *OED* が理解不足のせいか、「王室徴税人がどのようにでも書き込める証書」というあいまいな定義 (blank, *adj.* C2. a) を施してしまったことによって、「白紙証書 (blank charters)」は実在した課税制度と考えられている。ウォルシングムのおそらくフェイクニュース的な) 起源となる記述では、あらかじめ金額が書き込まれた証書が用意され、空欄になっていたのは裏書の債権者名である一方、16世紀後半期の年代記では空欄の項目が全く正反対な証書へと作り替えられていた。ホリンシェッド年代記 (1577年) はリチャード2世の暴政時代として知られる1397年から1399年までの暴挙を指弾する中で、「白紙証書」について以下のような説明をおこなっている。

国王〔リチャード2世〕の意向を酌んで、白紙証書が考案されロンドン市に持ち込まれた。富裕な市民の多くが不承不承署名したが、後に分かるように巨大な負担を負うことになった。同じ委任状は王国内の州すべてにも送付され、臣民の間で不満と怒りが渦巻くことになった。というのも、ひとたびこの委任状に署名押印すると、国王の役人がその証書にお金の支払い命令など好き勝手なことを書き込んだからである。

But yet to content the kings mind manie blanke charters were devised, and brought into the citie, which manie of the substantial and wealthie citizens were faine to seale, to their great charge, as

in the end appeared. And the like charters were sent abroad into all shires within the realme, whereby great grudge murmuring arose among the people; for when they were so sealed, the kings officers wrote in the same what liked them, as well for charging the parties with payment of monie, as otherwise... (Holinshed Vol. II, 848-49)

ホリンシェッドは、リチャードが1397年以降暴君と化し、富裕者を狙い撃ちにして、返済意思が全くない強制融資 (forced loan) を乱発するようになったという情報まではウォルシンガムの記述をそのまま拡散している。その一方で、ホリンシェッド年代記の「リチャード2世伝」には編纂史料としては悪質なところがあり、ウォルシンガムによる債権者空欄の強制融資証書は、*OED* の定義のように金額を「思い通りに書き込める」という悪魔のような借用証書に変えられている。

ストウ年代記 (1580年) になると、「白紙証書」の脚色はいっそう露骨になる。王国の臣民すべてに対し「白紙証書」が強制されたことになり、一部の人間が実際に徴収されたとする具体的な金額まで言及されるようになる。ホリンシェッドまでは「白紙証書」は富裕者だけを対象とした選択的な融資の強制だったものが、ストウになると全国一律に施行された課税に書き換えられた。

さらにリチャード王は好きな時に臣民個人もしくは全体を抑圧できるように、王国の臣民すべてに白紙証書へ署名するように強制した。その結果ある平民は1000マルク、別の平民は1000ポンド支払わされた。

Moreover, he [Richard II] compelled all the religious gentlemen and commons, to set their seales to blankes, to the end he might as he pleased him oppresse them severally, or all at once: some of the commons payd 1000, marks, some 1000. pounds, &c. (Stow 319)

言うまでもなく、ストウが語るような「白紙証書」は極道映画かファンタジーでしかありえないものであり、そのような課税が実施された記録はいっさい残されていない。私たちシェイクスピア研究者、とくに歴史劇研究者は16世紀の年代記がある程度の中立性と、史実への忠実性を持つと考えているが、シェイクスピア歴史劇の材源とみなされてきた種々の年代記は、演劇台本と同様それ自体「売れてなんぼ」の娯楽コンテンツであり、至る所でひそかに情報を書き換え、煽情的な脚色が施されていたのである。

3. 1590年代のリチャード2世劇におけるリチャード暴君表象

1590年代にリチャード2世治世を題材とした演劇作品はシェイクスピア劇（1596年頃）以外にも、『ジャック・ストローの生涯と最期』（1593年出版）と『ウッドストックのトーマス』（1594年頃）が存在する。この3作に共通するのは、リチャード2世の課税地獄に焦点が合わされ、重税感が芝居小屋ならではの表現で、いっそう煽情的に表現されたことである。

『ジャック・ストロー』は、第3回人头税が起爆剤になったワット・タイラー（ジャック・ストロー）の叛乱を劇化した劇作品である。冒頭でジャック・ストローが徴税人を撲殺する場面では、徴税対象の年齢を確認するために徴税人がジャック・ストローの「娘の身体をまさぐり始める」（*Life and Death of Iacke Strawe* 29）という、ホリンシェッド年代記の記述に由来するスキャンダラスな光景が演出される。

ホリンシェッド年代記は農民叛乱のきっかけについて「さまざまな人間がさまざまな説を語っている」という前書きを付け、出典不明でおそらく自作の情報を紹介していた。第3回人头税は「14歳もしくは15歳に達した男性および女性」をまれなく対象として徴収されたが、（当時は戸籍がなかったため）課税の判定基準は「性器のあたりに生えている体毛」すなわち陰毛が生えているかどうかであった（*Holinshed Vol. II, 735*）。ホリンシェッド年代記は続けて、ワット・タイラーの不在中に税徴収吏がその

娘に目を付け、母親が「14歳以下」という理由で納税を拒むと「道義が許さない検査を行った（search further than honestie would have permitted）」（Vol. II, 736）と記している。この顛末を知ったタイラーがすぐに帰宅して激しく抗議すると、逆に税徴収吏に殴打され、頭に血が上ったタイラーは役人を撲殺する。この衝撃的な税金徴収をそのまま舞台に載せたのが『ジャック・ストローの生涯と最期』であるが、史実の第3回人頭税は「15歳以上のイングランド人」に割り当てられたのに対し、『ジャック・ストロー』の徴税人は年齢を問わず、「住人すべてから税金を徴収」（*Life and Death of Jacke Strawe* 16）しており、この劇作品の人頭税は逆累進性が異様に高くなるものに脚色されている。

作者未詳の劇作品『ウッドストックのトーマス、あるいはリチャード2世。第1部』は1594年頃に執筆・上演されたと推定され（Corbin & Sedge 7-8）、現存する手稿本テキストは表題頁と最後の場面が欠落しているためにタイトルも推定上のものになる。劇世界の設定はリチャードの治世末期にあたる1397年から1399年までの3年間であり、この作品のリチャード2世は奇抜なファッションと贅沢三昧の祝宴で湯水のように浪費し続け、ついに王室財政が破綻しかける。そこに登場するのが「白紙証書」という打ち出の小鍮であり、臣民からいくらでも現金を搾り取れる恐るべき証書が司法長官トレジリアンから提案される。

トレジリアン 陛下、これをご覧ください、無垢な羊の皮、羊皮紙です。

その場の全員 証書には種も仕掛けもございません。

トレジリアン まっさらだ、何も書かれていない！

トレジリアン そこが味噌でございます。

この白紙の証書を国内すべての州、すべての長官にすぐに送り付けて、陛下のご命令で、長官の許へすぐさま

呼びつけるのです、地主から自作農、小作人、牧夫ま
で

税が払える者をもれなくすべて。

それから陛下の御名の下に、こやつらは
この白紙に署名し印を押すよう命じられるのです。
それが終われば白紙証書は宮廷へ回収され、
ほどなく現金を積んだ荷車が到着する次第です。

Tresilian See here, my lord, only with parchment, innocent
sheepskins. Yet see here's no fraud, no clause, no
deceit in the writing.

All Why, there's nothing writ!

Tresilian There's the trick on't
These blank charters shall be forthwith sent
To every shrieve through all the shires of England
With charge to call before them presently
All landed men, freeholders, farmers, graziers,
Or any else that have ability.
Then in your highness's name they shall be
charged
To set their names and forthwith seal these
blanks,
That done, these shall return to court again,
But cartloads of money soon shall follow them.

(Thomas of Woodstock 3.1.6-24)

『ウッドストックのトーマス』に登場する「白紙証書」は文字通りまっさらな羊皮紙であり、「税が払える」イングランド臣民すべてがこの羊皮紙に署名・押印しなければならない。トレジリアンは秘密警察組織を持って

いて、誰がどれだけの収入を得ているかを密かに調査させており、署名・押印された羊皮紙は収入の3分の1の金額が書き込まれる借用証書に変身する（4.1.21-32）。この司法長官は自分の「取り分が4、陛下には3」（4.1.8）として半分以上を懐に入れるが、さらに「陛下の3」の方もリチャードの放蕩三昧に消えていく。この劇では「白紙証書」に関してさまざまな情報を与えられるが、「まっさらな羊皮紙」という視覚的情報も、「収入の3分の1」とか「7分の4の取り分」など具体的でリアルな数値もすべて未詳の劇作家による創作である。「白紙証書」を考案したとされている司法長官トレジリアンも1388年に「訴追派貴族」によって処刑されており、劇世界の設定時期である1397年にはすでにこの世を去っていた。

「白紙証書」は中世期にも、シェイクスピア時代にも実在しない課税である。ところがその架空の税金がシェイクスピアの『リチャード2世』にも2度登場し、しかもその言及のされ方は、「白紙証書」について観客がそれなりの知識をもっていたことを示唆している。

リチャード

余自らこの遠征に向かうつもりだが、
寵臣の数と褒美のばら撒きの度が過ぎて
余の金櫃もぐっと軽くなってしまった。
こうなれば王領地の地代徴収権を貸し出して、
その貸借料で当座の遠征費用は
賄わせる。それでも不足するようなら、
国内の代理人に白紙証書をもたせよ、
金を貯めこんでいる人間が分かり次第、
そやつに署名をさせ、多額の金を払わせるがよい、
それから軍資金を余の許に送るのだ。

We will ourself in person to this war,
And, for our coffers with too great a court
And liberal largess are grown somewhat light.

We are enforced to farm our royal realm,
The revenue whereof shall furnish us
For our affairs in hand. If that come short,
Our substitutes at home shall have blank
charters,
Whereto, when they shall know what men are
rich,
They shall subscribe them for large sums of
gold
And send them after to supply our wants.

(The Tragedy of King Richard the Second 1.4. 41-50)

シェイクスピアの『リチャード2世』において「白紙証書」について説明されるのはそれが「白紙の証書 (blank charters)」であること、さらに狙われた富裕者がそれに自分の名前を「署名する (subscribe)」結果、「多額の金」が徴収されリチャードの「金櫃 (coffers)」に収められることだけである。言い換えれば、この情報だけで当時の観客が「白紙証書」なるものをおおよそ理解できたとすれば、『ウッドストックのトーマス』に登場する「白紙証書」がとくに知られ、観客はある程度の予備知識を持っていたからだと考えられる。

一方、シェイクスピアの「白紙証書」には『ウッドストックのトーマス』と異なる点もあり、上記の引用では、リチャードの「代理人」は好きな時にターゲットを選び、好きな額を証書に書き込めることになっている。司法長官トレジリアンの「白紙証書」では、「収入の3分の1」など、曲がりなりにも全国一律の徴収ルールが作られていたのに対し、シェイクスピアのリチャード二世が実施するのは究極の専制君主的な徴税、好きな時に好きなだけ好きな対象から搾り取ることができるものである。

4. シェイクスピアの『リチャード2世』における歴史の書き換え、作り変え

シェイクスピア時代の人間にとって「暴君 (tyrant)」の最大公約数的なイメージがあったとすれば、それは15世紀の法学者ジョン・フォートスキューが『イングランド君主制について』において示した「暴君」像、すなわち「臣下の幸福のためでなく、私利私欲のために王国を統治する (rulith his Realme onely to his own profytt, and not to the good of his Subgetts)」(Fortescue 453) 国王であったはずである。「私利私欲で統治する」リチャードが、年代記や他の劇作品では曲りなりに法的手続きを経て暴走するのに対し、シェイクスピアのリチャードは法律や慣習など全く意に介さず、娯楽ワールドならではの超法規的に統治するダーク・ヒーローへと作り替えられている。

ノルマン征服以降のイングランド王国史において、制度的に最も重要な問題は国王大権 (prerogative) がどこまで認められ、どこからは制限されるのか、その範囲である。この国王大権 (王権) の範囲に関して、シェイクスピアの『リチャード2世』には同時代の観客に印象深かったと思われる台詞がいくつか存在する。『リチャード2世』はボリンブルックとノーフォーク公爵モーブレーとの決闘から始まるが、第1幕第3場において、国王リチャードは決闘を開始直前のタイミングで中止させ、両者に国外追放の処分を宣告する。リチャードはモーブレーに永久追放、ボリンブルックにはいったんは10年間の追放処分を言い渡すが、すぐさまその場で4年分減刑する。リチャードの独断による減刑に対して、ボリンブルックは感に堪えないかのように以下のように語る。

ボリンブルック たった一言の中に長い年月がこめられている。

4回の足取り重い冬と心躍る春が一言で消えていく。

国王の言葉とはそういうものなのだ。

How long a time lies in one little word !

Four lagging winters and four wanton springs

Ends in a word; such is the breath of kings.

(*The Tragedy of King Richard the Second* 1.3.213-15)

シェイクスピア劇では国外追放処分も量刑の軽減も自由に国王リチャードが行えるように描かれているが、実はここからシェイクスピアの歴史（歴史書）の作り替えが始まっている。

ホリンシェッド年代記など種々の年代記資料では、決闘中止を命じたのは今日の内閣に相当する「国王と枢密院顧問官たち (the king and his council)」であり (Holinshed II. 847)、国外追放処分は2時間の協議を経て、制度的な手続きを経て行われている。4年の減刑は年代記の記述によるが、こちらも決闘当日ではなく、制度的な手続きを経た2週間後、ボリンブルックがフランスへ旅経つ前、エルタムでリチャードに謁見した際に告げられた (Holinshed II. 848)。

史実もしくは年代記のリチャードが曲がりなりにも枢密院との協議を通じて遵法的に統治していたのに対し、シェイクスピア劇のリチャードは同時代の被統治者たちが忌み嫌った超法規的な暴走王となり、裁判等は一切行わず、自らの恣意的な判断で処分や量刑を決めてしまう歯止めの利かない統治者である。「国王の言葉とはそういうものだ」という台詞は現実の王国制度ではありえない（というよりもあってはならない）、シェイクスピア独自のダーク・ファンタジー的な歴史設定で語られたものである。

『リチャード2世』の第1幕では、処罰と課税に関するリチャードの超法規的な暴走が描かれ、第2幕でも非常によく似た場面が登場する。ボリンブルックの父親ランカスター公爵ジョン・オブ・ゴントが重篤な症状に陥り、甥のリチャード王に最期の諫言を試みるも、リチャードは全く耳を貸さないばかりか、死ぬ間際のランカスターに対しその場で公爵領と動

産すべての没収を宣告する。

リチャード王 この大遠征には費用が大いにかさむ、
余の負担を軽くするために、わが叔父ゴントが
所有する金銀食器、貨幣、不動産収入、動産を
没収し、わが財産とせよ。
And, for these great affairs do ask some charges,
Towards our assistance we do seize to us
The plate, coin, revenues and movables
Whereof our uncle Gaunt did stand possessed.
(*The Tragedy of King Richard the Second* 2.1.159-62)

ランカスター公爵の相続権剥奪は史実として実際に起こったことであり、中世期イングランド社会における相続制度を根底からひっくり返す出来事であった。歴史研究者もこの暴挙をリチャード廃位の直接的な原因とするのが一般的で（Saul 403-4）、年代記でも激しく非難され、貴族たちの愛想を突かしめたとされるのがこの出来事である（Holinshed II. 849）。ただし、史実においてランカスター公爵ジョン・オブ・ゴントが急死するのは1399年2月2日になり、リチャードと枢密院はボリンブルックの追放処分を無期限（永久追放）に切り替えたうえで、1ヵ月半後の3月18日に、半年前に認可していたボリンブルックのランカスター公爵領相続を撤回し、継承権を剥奪した。

シェイクスピアの『リチャード2世』とは、王国統治において君主が私利私欲で好きなように統治するという、「法も正義も衡平も期待できるとは一切思われぬ（perceiuing that neither law, iustice nor equitie could take place）」（Holinshed II. 849）究極の圧制仮想世界である。その劇世界の設定の中で、国王大権の神聖不可侵性が、シェイクスピア時代の人間であればしばしば耳にした表現で語られることになる。

ゴーント この抗争を裁くのは神だ。というのも神の代理人、
神の御前で聖油を塗られた神の補佐役が
グロスターの死を引き起こしたのだから。
God's is the quarrel, for God's substitute,
His deputy anointed in His sight,
Hath caused his death,...
(The Tragedy of King Richard the Second 1.2.37-39)

リチャード王 荒れ狂う海の水をすべて注いでも、国王の体から
聖油を洗い流すことはできない。
世俗の者たちの言葉で、神によって選ばれし代理人が
免職になることはない。
Not all the water in the rough rude sea
Can wash the balm off from an anointed king;
The breath of worldly men cannot depose
The deputy elected by the Lord.
(The Tragedy of King Richard the Second 3.2.54-57)

上記の言説を文字通りにとらえれば、かりに悪しき王であっても、反抗や
叛乱は神の法にもとる許されざる行為になる。次節で詳述するが、このよ
うな絶対服従理念が提示された時期こそ、宗教改革後のチューダー朝イン
グランド社会だった。

5. 集団リンチ、「議会場面 (Parliament scene)」における国王 交代の作り替え

第4幕第1場は「議会场面」と呼ばれ、クォート版(Q1~Q3)で存在
しない約160行をめぐって、検閲による削除の可能性から注目されてきた

場面である。この場面そのものはかなりの部分がシェイクスピア独自の創作であり、とくにクォート版で削除された箇所が史実には存在しない露骨なフィクションになる。

[王] リチャードとヨークが登場

リチャード王 ああ、なぜ私が王の前に呼び出されるのだ、
国王であった頃の王者らしい気分をまだ
捨てきれずにいるのに。ペコペコしてこびへつらい、
膝を曲げたお辞儀の仕方が私はまだわからないのだ。

Enter [King] Richard and York

Alack, why am I sent for to a king
Before I have shook off the regal thoughts
Wherewith I reigned? I hardly yet have learned
To insinuate, flatter, bow and bend my knees.
(The Tragedy of King Richard the Second 4.1.163-66)

1399年8月15日頃、リチャードはウェールズのコンウェイで降伏し、事実上ボリンブルックの捕虜となり、ボリンブルックの求めに応じて議会を招集する。中世史研究者のナイジェル・サウルによれば、ちょうどこの時期にボリンブルックとその支持グループはリチャードを廃位して、ボリンブルックが新国王となることを決断した (Saul 417)。8月下旬にリチャードとボリンブルックはチェスターを経由して、ロンドンに向かい、翌月の9月30日にリチャード2世の招集で議会が開かれた。この議会の冒頭でリチャード2世の退位宣言書が読まれ、よく知られる33項目の弾劾文が議会で読み上げられた後、「満場一致で、何の反対もなく、議員たちは王国すべての階層を代表してリチャード王の廃位手続きに賛同した」 (Given-Wilson (1993) 185)。廃位手続き完了によって王位が空白になると、ヘンリー・ボリンブルックが中央部に進み出て、英語史の上でよく知

られるエピソードであるが、イングランド王国史上初めて英語で王国領の要求を行った。各階級代表数名が意見陳述をして、これまた満場一致で王位要求は承認された。

確実に言えるのは、9月30日の議会でリチャード2世退位の手続きが本人の同意のもと、本人不在で行われ、この日付けでヘンリー4世が即位したことである。その1週間後、10月6日に新国王の名で新議会が招集、開催され、13日に戴冠式が行われることが決定された。「議会場面」の冒頭ではまずオーマール公爵のつり上げが演じられているが、これに類することが起きるのは後の議会においてであり、シェイクスピアはこの場面をリチャード一派に対する集団制裁の場にした。次いでシェイクスピア劇では、ヨーク公爵からリチャード王の退位同意とボリンブルックの法定相続人指名が告げられ、ボリンブルックがその提案を受け入れると（正規の手続きと異なり、王国領要求宣言はしない）、王位継承の円滑な手続きを一変させるカーライルの演説が始まる。

結果からすると、このカーライルの演説は「シェイクスピアによって永遠にされているけれども、この年代記〔親リチャード一派によるフランス語年代記『叛乱と為政者の死』〕で映像的に描かれた『史実（facts）』の多くと同じように、しばしば疑われてきた」（Given-Wilson（1993）190）。この演説そのものが、ある段階から親リチャード一派の年代記が「事実」として紛れ込ませたフェイクニュースである可能性が高く、さらにシェイクスピア劇では演説の中身そのものがシェイクスピア時代の人間でないとう理解できないものへと変更されていた。

年代記のカーライルは、リチャード王本人が不在のまま国王が弾劾され、廃位の手続きが行われるのはおかしいと手続き上の問題を指摘するのに対し、シェイクスピアのカーライルはシェイクスピア時代の『欽定説教集』の代弁者となり、手続きうんぬん以前に、神の代理人が臣下の判断で廃位されるのは理念的、制度的にあってはならないと断言する。

カーライル　しかるに、神の權威の似姿であり、
神の指揮官、執事、選ばれし代理人、
聖油を塗られ、王冠を授けられ、長年統治なされてきた
そのお方がこの場にいらっしゃらないまま、
卑しい臣下の判断で裁かれていいものでしょうか。
And shall the figure of God's majesty,
His Captain, steward, deputy elect,
Anointed, crowned, panted many years,
Be judged by subject and inferior breath,
And be himself not present?
(*The Tragedy of King Richard the Second* 4.1.126-30)

『リチャード2世』の劇世界で繰り返し語られるのが王権神授説 (divine right) であり、この神学的言説を受け入れれば、国王大権はいかなる制度的制限も受けなくなり、国王は自由に権力を行使しうることになる。ただし上記の引用のような、絶対服従と結び付けられる「神の代理人」言説が流通していたのはリチャード2世時代ではなく、宗教改革後のイングランド社会においてであった (Hart 19-23)。

プロテスタント国王への反抗を奨励するローマ・カトリック教会への対抗措置として、イングランド国王への絶対服従を英国国教会の立場から表現したのが、『欽定説教集』第10章「良き秩序と統治者への服従に関する勧め (An Exhortation concernyng Good Ordre and Obedience to Rulers and Magistrates)」である。

この聖書の記述から [サウル王に対するダヴィデの服従の記述から]、われわれは神の副官、代理人であり、王として支配する国家において最高位の臣下である、神の聖油を受けた国王にいかなる点でも反抗したり、害を及ぼしたりしてはならないことは明らかである。

Here is evidently proved that we may not resyst, nor in any wayes hurt an anointed kyng, which is Gods liuetenaunt, vicegerent and highest misister in that country where he is kyng.

(*Certain Sermons or Homilies*, 166)

シェイクスピアの『リチャード2世』では、劇世界の王国諸制度がリチャード2世時代ではなく、シェイクスピア時代のイングランド王国のそれに変更されている。さらに、年代記に描かれたリチャード2世も、史実や年代記のリチャード2世ではなく、シェイクスピア時代風に書き換えられた世界で国王大権の行使を制限なく行う暴君リチャードへと作り替えられている。簡単に言えば、自分たちの王国と同じ制度を持つ仮想世界で、歯止めの利かない暴走国王を出現させてしまうという究極の圧制体験劇である。現実世界では暴君といえども叛乱、抵抗の類はご法度という規範を繰り返して塗り込まれるが、娯楽ビジネスの芝居小屋は民衆の鬱憤をきれいに晴らしたであろう場面を設けていた。

「議会場面」は、現実社会では忍従すべしと公的に諭される暴走国王とその一派への制裁が可能となる仮想世界である。オーマールのつるし上げや、カーライルの国王大権神授説の演説も、さらには、ボリンブルックによる現国王リチャードの呼び出しという衝撃的な光景もすべてシェイクスピアが作り上げたフィクションであるが、これら年代記記述の書き換え現象は、観客（民衆）の圧制に対する潜在的な怒りと制裁願望という観点からのみ理解可能である。

6. 新たな娯楽コンテンツ、「歴史劇」

『(国王) リチャード2世 (*King Richard the Second*)』が今日の私たちになじみのタイトルであるけれども、第1フォリオ版の目次では『国王リチャード2世の生涯と死 (*The Life and Death of Richard the*

Second)』である。「生涯と死」という表現を文字通りに受け入れれば、『リチャード2世』の劇世界はリチャードの廃位以降も続き、主人公が死をとげる場面で幕を閉じるべきことになる。

史実におけるリチャードは廃位されてからおよそ4カ月後の1400年初めに、監禁先のポンフレット上で死亡したとされる。同時期の公式記録は1400年2月17日としているが（Given-Wilson (2017) 163）、正確な死亡時期は不明であり、同時期の記録者たちは1400年1月中旬と推定していた（Saul 425）。今日、多くの人間がリチャード2世はシェイクスピア劇のように暗殺者の手によって非業の死を遂げたと考えているだろうけれども、歴史研究者たちは19世紀末に行われたリチャードの遺骨調査の結果を踏まえ、他殺の可能性をほぼ否定している（Given-Wilson (2017) 163-64; Saul 425）。ホリンシェッド年代記はリチャードの死因に関して、強制的餓死説、自発的餓死説、暗殺説という3種類の可能性を紹介しているが（Holinshed III. 13-14）、このことは、シェイクスピア時代の人間にはリチャードが死亡する経緯そのものがミステリーであったことを示している。

今日の私たちにとって興味深いのは、最も可能性が低いにもかかわらず、ホリンシェッド年代記では、暗殺説だけが具体的かつ詳細に、あたかも証言者がその場に居あわせて一部始終を目撃したかのように紹介されることである。

リチャード王は正餐の席に着いたが、この日は給仕と毒見が行われなかった。突然の変化を大いに訝り、侍従にどうして任務を怠るのか詰問したところ、「今しがたヘンリー国王陛下から派遣されてきたエクストンのピアズ様から、給仕と毒見はしないようにと申しつけられました」と返答された。その言葉を聞くと、リチャード王は肉切りナイフを手にして、「ランカスターのヘンリーとお前は悪魔に取り憑かれろ！」と叫びながら、侍従の頭に切りつけた。その言葉を聞くと、甲冑姿のサー・ピ

アズが同じく鎧をまとい、矛を手にした8名とともに部屋になだれ込んできた。

King Richard sat downe to dinner, and was serued without courtesie or assaie, wherevpon much maruelling at the sudden, he demanded of the esquire whie he did not his dutie; “Sir (said he) I am otherwise commanded by sir Piers of Exton, which is newlie from K. Henrie.” When king Richard heard that word, he tooke the karuing knife in his hand, and strake the esquire on the head, saieng The diuell take Henrie of Lancaster and thee together. And with that word, sir Piers entred the chamber, well armed, with eight men likewise armed, euerie of them hauing a bill on his hand. (Holinshed III. 14)

ホリンシェッド年代記はこの後、リチャードが8名の従者のうち4名を殺害し、活劇さながらの奮戦をしてから、「サー・ピアズが振り下ろした斧の一撃を頭上に受け、過去の過ちの赦しを神に乞う暇もなくそのまま絶命した」と伝えている。ホリンシェッド年代記では即死しているリチャードが、シェイクスピア劇ではサー・ピアズへの呪いと自らの魂の天国への飛翔という5行にわたる台詞を絶叫してから地面に倒れる。従者の数が舞台台本ではおそらく数名に減らされていただろうけれども、過去の過ちを悔いずに亡くなることも含めて、シェイクスピア劇では第5幕第5場96行目からほぼそのままホリンシェッド年代記の記述が舞台化されている。ちなみに、今日の歴史研究の領域で暗殺説が受け入れられていないのは、19世紀末の遺骨調査では「斧の一撃」に該当する外傷の痕跡が一切見られなかったためである。

ホリンシェッド年代記は死因に関する3つの説を紹介しているが、すべてに共通するのはリチャード2世が自らの暴君行為には無自覚であったことである。トマス・ウォルシンガムの名前を挙げながら、ホリンシェッド

年代記はリチャードが自発的に餓死した可能性を伝えているが、リチャードが自死を選んだのは、国王時代に犯した自らの過ちを悔いたからではなく、ウィンザーとオクスフォードで2度計画されたりチャード・シンパによるクーデターが未遂に終わり、復位の望みが消えたからである（Holinshed III. 13）。シェイクスピアのリチャード2世は第5幕第5場において冒頭から66行にわたる長い独白を語るが、その内容は、国王時代と「物乞い」同然となった現在の間で揺れ動き、妄想で時間を潰すしかなくなった自分に耐えられない現況である。

リチャード　　このように私は1人で多くの人間を演じてみるが、
どの役にも満足できない。王を演じることもある。
すぐに叛乱を想像して、物乞いの方がいいと思ひ込む。
そこで物乞いになる。すると恐ろしい貧困が浮かんでき
て

国王の方がよかったと思ひ直してしまう。

Thus play I in one person many people,
And none contended. Sometimes am I king;
Then treason makes me wish myself a beggar,
And so I am. Then crushing penury
Persuades me I was better when a king.

(The Tragedy of King Richard the Second 5.5.31-35)

シェイクスピア劇のリチャードは、過去の過ちを悔いて亡くなる良識的なキリスト教国王ではない。終始一貫して誇り高く、この引用のように気まぐれでナイーブな暴走国王であり続け、娯楽コンテンツの中でリチャード3世のように観客読者の関心をさらってしまう悪役主人公である。王国諸制度を破壊するとしてもない国王を舞台上に出現させることにより、シェイクスピア時代の観客たちは王国統治大混乱のシミュレーションを体験し

たのである。

1623年に刊行された最初のシェイクスピア全集（第1フォリオ版）において編纂者であるジョン・ヘミングとヘンリー・コンデルは、36作品を「喜劇（Comedies）」、「歴史劇（Histories）」、「悲劇（Tragedies）」という3つのカテゴリーに区分した。筆者自身、8年前の論考で強調したが、「歴史劇」は年代記の単なる演劇的翻案物ではない—「歴史劇の受容をシェイクスピア時代のコンテクストで分析してみると、芝居小屋でしか体験できなかったイングランド王国史の作り替え、あるいは王国諸制度のシミュレーションという歴史劇固有の原的な面白さが浮かび上がってくるはずである」（中野48）。

[本研究はJSPS 科研費・基盤研究B「エリザベス朝英国史劇における民衆のイングランド王国表象」（研究代表者・中野春夫／課題番号21H00511／研究期間R3-R6）、JSPS 科研費・基盤研究B『『シェイクスピア崇拜』と18世紀イングランド娯楽ビジネス』（研究代表者・佐々木和貴／課題番号20H01242／研究期間R2-R5）、JSPS 科研費・基盤研究B「娯楽文化史からとらえるエリザベス朝演劇—社会変化が生み出す総合エンターテインメント」（研究代表者・篠崎実／課題番号19H01238／研究期間R1-R4）およびJSPS 科研費基盤研究C「シェイクスピア劇の小唄—テキストに埋め込まれた聴覚的連想イメージコード」（研究代表者・中野春夫／課題番号17K02514／研究期間H29-R2）の助成を受けた成果である。]

（『リチャード2世』の引用はアーデン版第3版による—William Shakespeare. *King Richard the Second*. Ed. Charles R. Forker. Arden Shakespeare Third Series. London: Bloomsbury Arden. 2002.

参考文献

Arnold-Baker, Charles. *The Companion to British History*. Tunbridge Wells: Longcross Press, 1996.

- Barron, C. M. 'The Tyranny of Richard II'. *The Bulletin of the Institute of Historical Research*. Vol. 41, Issue 103, pp. 1–18.
- Briggs, Asa. *A Social History of England: New Edition, From the Ice Age to the Channel Tunnel*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1994.
- Braddick, Michael J. *The Nerves of State: Taxations and the Financing of the English State, 1558–1714*. Manchester: Manchester University Press, 1996.
- *Parliamentary Taxation in Seventeenth-Century England: Local Administration and Response*. Woodbridge: The Boydell Press, 1994.
- Caster, Helen. *Blood and Roses: One Family's Struggle and Triumph during the Tumultuous Wars of the Roses*. 2004. New York: Harper Perennial, 2007.
- Certain Sermons or Homilies (1543) and A Homily against Disobedience and Wilful Rebellion (1570): A Critical Edition*. Ed. Ronald B. Bond. Toronto: University of Toronto Press, 1987.
- Cogswell, Thomas. *Home Divisions: Aristocracy, the State and Provincial Conflict*. Manchester: Manchester University Press, 1998.
- Corbin, Peter & Douglas Sedge, eds. *Thomas of Woodstock, or Richard the Second, Part One, Anon*. Manchester: Manchester University Press, 2002.
- Elton, G. R. *The Tudor Constitution: Documents and Commentary, Second Edition*. Cambridge: Cambridge University Press, 1982.
- Fortescue, John. "On the Monarchies of England". *The Family of Fortescue in All Its Branches*. 2 vols. Ed. Thomas Fortescue Lord Clermont. London: Private publication, 1869.
- Given-Wilson, Chris, Trans & Ed. *Chronicles of the Revolution 1397–1400: The Reign of Richard II*. Manchester: Manchester University Press, 1993.
- *Henry IV*. New Haven: Yale University Press, 2016.
- Hall, Edward. *Hall's Chronicle*. 1809. New York: AMS Press, 1965.
- Harriss, G. L. "Theory and Practice in Royal Taxation: Some Observations," *Historical Review* Vol. 98 (1982), pp. 811–19.
- Hart, Alfred. *Shakespeare and the Homilies: and Other Pieces of Research into the Elizabethan Drama*. New York: Octagon, 1970.
- Hattaway, Michael ed. William Shakespeare, *The Second part of King Henry VI*. 'Introduction'. Cambridge: Cambridge University Press, 1991.
- Holinshed, Raphael. *Holinshed's Chronicles of England, Scotland, and Ireland*. 6 vols. 1808. New York: AMS press, 1965.
- Journals of All the Parliaments during the Reign of Queen Elizabeth, The*

- Simonds D'Ewes, ed. 1682. Shannon: Irish University Press, 1973.
- Jones, Whitney R. D. *The Tree of Commonwealth. 1450-1793*. London: Associated University Press, 2000.
- Longstaffe, Stephen. *A Critical Edition of The Life and Death of Jack Strawe*. Mellen Critical Editions and Translations, Vol. 9. New York: The Edwin Mellen Press, 2002.
- The Lyfe and Death of Iacke Strawe*, The Marone Society Reprints, Oxford: Oxford University Press, 1957.
- Mchardy, Alison K. *The Reign of Richard II; From Minority to Tyranny*. Manchester: Manchester University Press, 2012.
- McMullan, Gordon, ed. William Shakespeare. *King Henry VIII*. The Arden Shakespeare, The 3rd series. London: Thomson Learning, 2000.
- Saul, Nigel. *Richard II*. New Haven: Yale University Press, 1999.
- Schoenbaum, Samuel. *William Shakespeare: A Documentary Life*. Oxford: The Clarendon Press, 1975.
- Schofield, Roger. *Taxation under the Early Tudors 1485-1547*. Oxford: Blackwell Publishing, 2004.
- Statutes of the Realm*, 12 vols. 1819. Buffalo: William S Hein, 1993.
- Stow, John. *Annales, or, a Generall Chronicle of England*. Edmund Howes, ed. London: Richard Meighen, 1631.
- Thomas of Woodstock, or Richard the Second, Part One*. Ed. Peter Corbin and Douglas Sedge. Manchester: Manchester University Press, 2002.
- Ure, Peter, ed. William Shakespeare, *King Richard II*. The Arden Shakespeare 2nd series. London: Methuen, 1956.
- Walsingham, Thomas. *Quondam Monachi S. Albani, Historia Anglicana*. 2 vols. 1864. London: Kraus Reprint, 1965.
- Williams, Penry. *The Tudor Regime*. Oxford: Clarendon Press, 1979.
- . *The Later Tudors: England 1547-1603*. Oxford: Clarendon Press, 1995.
- 『イギリス史1』、青山吉信編、山川出版、1991年
- 中野春夫「歴史劇受容の特異性—これまでとこれから—」、「シェイクスピア協会会報 Shakespeare News」、第53号第1巻、2013年9月、42-49ページ